

2022年2月13日顕現後第6主日

エレミヤ書 17章 5-10節

コリントの信徒への手紙一 15章 12-20節

ルカによる福音書 6章 17-26節

2022年度の堅信受領者総会は、皆さまのご協力のもと、無事文書にて開催することとなりました。お返信いただくはがきの締め切りが、2月13日(日)本日ですので、最終的なご報告は、来週となると思います。本日11時から、堅信受領者総会の質疑応答の集いを持ちます。すでにご質問をいただき、回答も郵便の方は木曜日に発送し、ファックスと電子メールの方は昨日送信しておりますが、礼拝に出席されたBグループの方、リモートで参加された方とともに、あらためて質疑応答の時を持ちたいと思います。

これらの理由から、本日の礼拝は10時からです。11時から質疑応答となりますので、実際の礼拝の中での説教は、ほんの一言になると思います。ただし、毎週、み言葉から学ぶことは大切です。本日は、『聖書』の学びとして、使徒書、「コリントのへの信徒への手紙」を中心に学びたいと思います。

先週の使徒書の箇所は、復活について、パウロが自分自身も受けていた伝承をもとにして説明したところでした。本日は、その続きで、パウロが死者の復活について語っています。主イエス・キリストの復活は、教会の信仰の始まりであり、根本です。パウロが、その根本について、あらためてこのように説明しているのは、コリントの教会において、復活という事柄について様々な疑問の声があったからでしょう。パウロはその疑問に対して、キリストの復活も死者の復活も相互依存しながら存在するだと強調しています。

「キリストは死者の中から復活した、と宣べ伝えられているのに、あなたがたの中のある者が、死者の復活などない、と言っているのはどういうわけですか。」

(1コリ 15:12)。ここで述べられている「ある者たち」について、聖書外資料などから、正確に理解する事は出来ません。そのためこの手紙自体から推測するしかないのですが、教会外部の人々ではなく、コリントの教会の信徒であることは確かです。「**あなた方の中の**」とあるからです。それゆえ、可能性として、第一に、キリストの復活については納得したが、キリスト以外の人間の復活については納得いかない人々と推測できます。第二に、復活そのものを受け入れてはいないが、コリント教会のあり方、あるいはイエス様の教え(恐らくは、共同の食事、理想的な平等意識など)などに賛同して、キリスト者となった人々も考えられます。これらに対してパウロは、キリストの復活とそれを信じる信徒の復活は、教会にとっても、各個人にとっても、不可欠な事柄であると語ります。それゆえに、「**死者の復活がなければ、キリストも復活しなかったはずです。**」(1コリ 15:13)と述べるのです。

ここでパウロは、単純な疑問に対して単純な答えで応答しているといえます。すなわち、死んだ人間の復活がなければ、死んだ人間であるキリストの復活もないということです。これで疑問を持つ人々が納得したかどうかはわかりませんが、この応答にある単純な論理の中に、重要な事柄があります。わたしたちのキリスト者の復活の希望の根拠は、キリストの復活にあるのですが、わたしたちがそのことを信じること、あるいはわたしたちも復活するという希望が、キ

リストの復活の根拠にもなっているように述べているからです。

しかし、パウロは、「そして、キリストが復活しなかったのなら、わたしたちの宣教は無駄であるし、あなたがたの信仰も無駄です」（1 コリ 15：14）と、再びここで宣教と信仰の根本が、キリストの復活であることを述べます。これは、「イエスは復活した」という事実の提示が、教会の宣教の最初であるという今日でも大切な理解と一致しています。厳密には、「イエス」と考える場合と、「キリスト」と考える場合では少し異なるのですが、ここでは同じと意味と考えます。またここで大切なことは、パウロが、キリストの復活を、教会宣教の始まりであり、土台であり、内容そのものだととらえていたことです。

「更に、わたしたちは神の偽証人とさえ見なされます。なぜなら、もし、本当に死者が復活しないなら、復活しなかったはずのキリストを神が復活させたと言って、神に反して証しをしたことになるからです」（1 コリ 15：15）と、ここで「偽証人」という言葉が出てきます。これはヘレニズム社会でも「偽証」が悪い行為であるということもあると思いますが、特に「神の偽証人」となっていることが特徴です。それは主なる神様のなさった行為を偽証したことになるということです。すなわち、「本当に死者が復活しないなら、復活しなかったはずのキリストを神が復活させた」と人間が勝手に証言したとのならば、主なる神様に対して偽証したことになるということです。ここでパウロは、死者の復活とキリストの復活とを直結させて考えているので、このような結論に導かれるのですが、再び13節と同じように「死者が復活しないのなら、キリストも復活しなかったはずです」（1 コリ 15：16）と断言します。また、「そして、キリストが復活しなかったのなら、あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今もなお罪の中にあることになりまします」（1 コリ 15：17）と続けます。ここは一種の論理のドミノ倒しの論が展開されています。死者の復活は、キリストの復活を否定し、キリストの復活の否定は、そこにおいて起こった罪の許しを否定することになり、教会の信仰を信じるのが空しくなり、信じたとしても罪はそのまま残るということです。これらは、すべての論理を直結させるパウロならではの主張です。

18節以降、パウロは視点を変えます。もし、キリストが復活しなかったならば、また、死者の復活がなかったならばどうなるかという状況についてです。パウロは、「そうだとすると、キリストを信じて眠りについた人々も滅んでしまったわけです」（1 コリ 15：18）。「キリストを信じて眠りについた人々」は、直訳すれば「キリストにおいて眠った人々」です。「信じて」という動詞の部分はありませんが、キリストとの関係性を示すために、「信じて」と意識されています。また、「眠る」という身体的に動作が、「死」に比喩的に用いられるのは、時代・文化を超えて共通しています。そして、ドミノ倒しの論理はさらに続いているのです。すなわち、もし復活がなければ、信仰に入っただけで死んだ人々も、ただ滅んだことになるという結論です。

15章6節でパウロは、「次いで、五百人以上もの兄弟たちに同時に現れました。そのうちの何人かは既に眠りについたにしろ、大部分は今なお生き残っています」と、そのような人々の存在を伝承とあわせながら言及していました。パウロが生きていた時代は、のちの教会の時代と異なり、初めてキリストの復活に基づく教会の信仰に入って、まだ死を経験していない人と、すでに逝去した人とが混在していました。そして、それゆえに、両者とも復活の希望の下にあ

り、もしキリストの復活・死者の復活がないならば、両者ともその死は、単なる滅び・死亡に過ぎないと語っているのです。

「この世の生活でキリストに望みをかけているだけだとすれば、わたしたちはすべての人の中で最も惨めな者です」(1 コリ 15:19)。聖書日課の使徒書は、20節までですが、「新共同訳聖書」では、この節で段落が区切られています。その意味では、この節がここまでの結論いえませぬ。すなわち、キリストを信じ、他の希望ではなく、復活にのみ希望を持って、今「この世の生活」を生活している人たちは、死者の復活はないならば、何の希望もないもつとも可哀想な人々に他ならないということだす。もちろん、期待すべき答えは、そうであるはずがないということになるのですが、パウロは決して、みんなが期待して、そこに希望があるからこそ、復活が実際のあると言っているだけではありません。ただし、復活という現象は、パウロの時代でも、現代においても、証明できるような対象でもありません。人間が証明して確認できる事柄は、人間の思惟的範疇の事柄にとどまるからだす。そして、そうであるがゆえに、復活とは信じるべき事柄ということになるのですが、復活を信じることは、何の根拠も手掛かりもなく信じるわけではありません。なぜならば、わたしたち人間が、わたしたちの思いを超えた復活という事柄を、信じることができるようにと、証としてキリストの十字架の死と復活があるからだす。

先週の使徒書ですで見えてきたとおり、パウロの論理は、パウロ自身の思惟的思考の結果ではなく、自分が受けた伝承を基にして、全てを直結して考えています。すなわち、キリストの復活、キリストによる罪の贖い、死者の復活、今生活している人間の生活上の希望、これらが全て繋がっているのです。それ故に、どこか一つでも否定することは、それらすべてが連鎖的に否定されるということだす。

このことから、死者の復活を否定する「ある人々」が、どのような考えを持っていたかについて、ある程度は推測できるかもしれません。15章1節～11節の伝承の引用は、キリストの復活についての証拠の提示だす。手紙を書いているパウロ自身もその証言者であり、「ある人々」もその宣教を納得し受け入れたのでしょゆ。問題は、彼らにとって、パウロの考えるように、それがそのまま死者の復活、すなわち、キリストを信じた人の復活、さらには人間一般の復活には結びつかないということだす。彼らがそのように考える根拠となるのは、恐らくパウロ自信の伝承への言及にもあった、信じてはいたがすでに眠りについて人々の存在であったと思ひます。彼らはまだ復活していません。それゆえに、この箇所の後が続く、15章23節でパウロは、それぞれ順番があると述べます。しかし、伝承された宣教されたキリストのように復活していないことは事実だす。そこから死者の復活はやはりない結論付けることは、具体的な事象から理性的に理解できる事柄にほかなりませぬ。

それらの疑問に対するパウロの反論は、先の見たとおりだす。全てが直結しているが故に、伝承について確信を持って受け入れられるのであれば、死者の復活にも確信を持てるのであり、またそうでないならば、全てが揺らいでしまふということだす。すなわち、パウロにとって、死者の復活は信じられないが、キリストの復活は信じられるという理解は間違いなのです。

しかし、「ある人々」は、極めて理性的な判断をしているといえるのですが、それでは、彼らは何を根拠に信仰に入ったのか、教会の交わりに入ったのかと

いう疑問が生じます。問いに対して、第一に、キリストの十字架死の意味が関係していると思います。パウロにとって、キリストの十字架の死は、犠牲による贖罪としての意味があります。律法の下で歩むユダヤ人にとって、贖罪は神殿祭儀に代表されるように、大きな意味を持ちます。それが決定的な仕方で成し遂げられたのが、キリストの十字架の死であり、キリストは他の何物とも比較できないような犠牲であったという論理は、ユダヤ人たちにとって納得しやすいことです。しかし、同時に、贖罪を強調する場合、その捧げられる犠牲の死が重要であって、その犠牲の復活は必ずしも不可欠ではないということにもなります。神殿祭儀において動物を犠牲にささげますが、その復活は必要ないからです。また、キリストの尊い犠牲を重んじる人々が、それでもイエス様自身の復活をある程度受け入れられたとしても、それ以外の人々と復活とを結びつける必要は必ずしもありません。なぜならば、それが決定的な犠牲であることを信じることによって、信じる者の贖罪の機能はすでに果たされていると思われるからです。

第二に、主の晩餐という文脈の中で共同の食事などに、教会の重要性を置く人びとが、パウロの時代にも存在したと思います。そのような人々にとっても、この世の生活には、いままで存在しなかったような平等の食事、それに基づいた平等の人間関係を維持することが目的であるとするならば、キリストの復活も、信者の復活も必ずしも不可欠な要素とはなりません。その食事を維持することさえ出来れば、この世の生活において救いを感じる事が出来るからである。但し、そのような観点の人々にとっては、死者の復活をあえて強く否定する必要はありません。もしあるとするならば、キリストの復活は伝えられた通り受け入れるが、信仰に入って既に死んだ人間が死んだままでいるのであるから、キリスト以外の人間の復活はないかもしれないというぐらいの事柄でしょう。

ここにおいて、パウロが対峙したコリントの人々は、キリストを通じた教会の教え・信仰における根本問題に対して、問いかけをしていたといえます。すなわち、キリストの復活は、どのような意味を持ち、生きる上で必要不可欠なものなのかということです。そのような問いに対する答えは、21節以下に述べられます。すなわち、「**死が一人の人によって来たのだから、死者の復活も一人の人によって来るのです。つまり、アダムによってすべての人が死ぬことになったように、キリストによってすべての人が生かされることになるのです**」(1コリ 15) 21-22) という部分です。すなわち、キリストの十字架の死と復活という出来事も、わたしたちが「**この世の生活**」に生き、そしてそれぞれが必ず死を迎えるという出来事も、天地創造の初めからの事柄に結び付いているということです。そしてそうであるがゆえに、それらをすべて無視して、この地上に生だけに執着しない限り、キリストの十字架の死と復活、そしてそれに伴うわたしたちすべての人間の死者の復活は、わたしたちの希望の確信としてかかわっているということです。

本日の聖書日課は、「**しかし、実際、キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂となられました**」(1コリ 15:20) となっています。キリストの死と復活は、客観的事実とは言えませんが、信じることのできる対象です。そしてその信仰に立つとき、わたしたちにはゆるぎない希望があります。そして、その希望から、わたしたちの「**この世の生活**」に安心と励ましがあります。これからもそのことを、教会を通して確認していきたいと思います。